

同じ認知症だから分かること 相談員、心通わせ私は働く

朝日新聞 2018.8.19 森本美紀記者



オレンジカフェの利用者と談笑する渡辺康平さん 槌谷綾二記者撮影



渡辺康平さんは、通院する香川県三豊市立西香川病院の非常勤職員として働いて1年余りになります。仕事は「オレンジカフェ」の相談員。認知症とわかった時の「どん底」を乗り越え、今は認知症の人やその家族と心を通わせることに生きがいを感じるといいます。

《病院の敷地内にあるオレンジカフェは金曜午前10時～午後3時。渡辺さんは認知症の人や家族を笑顔で迎え、「まあ、1杯どうですか」とコーヒーを勧める。職員2人とボランティア2人のスタッフとともに、訪れた人の心を解きほぐしていく》

認知症の人の心はガラスのようにナイーブです。僕自身の体験、例えば72歳で認知症とわかった頃の不安や混乱、物忘れはしてもできることを楽しむこと、そんなことを話し、その人が心を開くまでじっくり待つよう心がけています。初めはうつむいていた人が顔を上げ、笑顔になり、語り、行動範囲を広げていく。目の輝きが変わり、自分を取り戻したとじてもらえた時が最高の喜び。その達成感が生きがいです。

《西香川病院で認知症の人が職員になるのは初めて。病院での雇用は全国でも珍しいという。認知症の本人として発信する仙台市の会社員・丹野智文さん（44）が昨年5月、病院が開いた認知症の啓発行事を訪れた際、渡辺さんの雇用を大塚智丈院長（55）に提案。認知症の人による心理的な支援を考えていた院長の決断で翌月、渡辺さんは妻の昌子さん（75）が運転する車で勤め始めた》

エネルギーあふれる丹野さんの姿に、自分も何かできるのではと勇気づけられました。初めは手探り状態でしたが、以前の仕事や地域活動でいろいろな人の相談にのっていた経験が生きていると感じます。

最初はボランティアでと思ったのですが、「後に続く人のために」という丹野さんや院長の考えを聞き、認知症でも働ける道を開く一歩になればと非常勤職員をお引き受けしました。確かに「仕事」となるとギアのかけ方が違いますね。待っている人のためにちょっと調子が悪くても行かんと、と思う。責任を伴うことがいい緊張感になっています。

パソコンを思うように打てなかったり、長文が読めなかったり、そういうことはあります。でも、相談員として関わることで生き生きと暮らす人を増やし、認知症はこわいという偏見をなくしたいんです。

《認知症の診断は3年前、観音寺民主商工会会長の時。落ち込み、体重は数カ月で22キロ減った。支えになったのは、碁会所の仲間だった》

1日前の大事な会話の記憶がすっぽり飛び、長男の勧めで受診すると認知症だと。自分でなくなったようでどん底でした。周囲に迷惑をかけまいと認知症だと伝えたのですが、うれしかったのは碁仲間が「認知症でもどううちゅうことない」と普段通りに接してくれたこと。軽口をたたいて笑い合う。温かくてさばさばした関係が心地いいんです。

碁仲間「むしろ若返った」

大塚智丈院長は「相談者にとって渡辺さんは、認知症の人しかわからない体験や思いを共感してもらえ、元気な姿から希望をもらえる大きな存在。当事者にしか持ち得ない力が心理的サポートに不可欠だと実感します」。渡辺さんの話に涙を流し、思いを吐露して生きる力を取り戻した人もいる。今後は第二、第三の渡辺さんを発掘するのが課題という。

観音寺囲碁会館で四段の腕前の渡辺さんだったが、診断後は「ぼろ負けした」。でも、手加減なしの仲間と過ごす場が居心地良く、気持ちも落ち着き徐々に復調。今年2月、会館の約20人で競うリーグ戦で優勝し、翌月五段に昇段した。

30年来の仲間の男性（79）は「石を持つと表情が変わり、のめりこむ姿は認知症になる前とちっとも変わらん。むしろ若返った」と笑う。渡辺さんを碁の先輩、人として尊敬するという会館席主の星川富美子さん（62）は「認知症にはいろんなタイプがあり、認知症になっても不安ばかりでないと知りました。いつまでも対戦を楽しみたい」と話す。



わたなべ・やすひら 香川県観音寺市在住。49歳でNTTから観音寺民主商工会に転職し、会長だった2015年4月、脳血管性認知症と診断。17年6月、西香川病院の非常勤職員に。認知症に関する講演もしている。